

ウ 研究委嘱（平成12・13年度埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会）

(ア) 研究主題

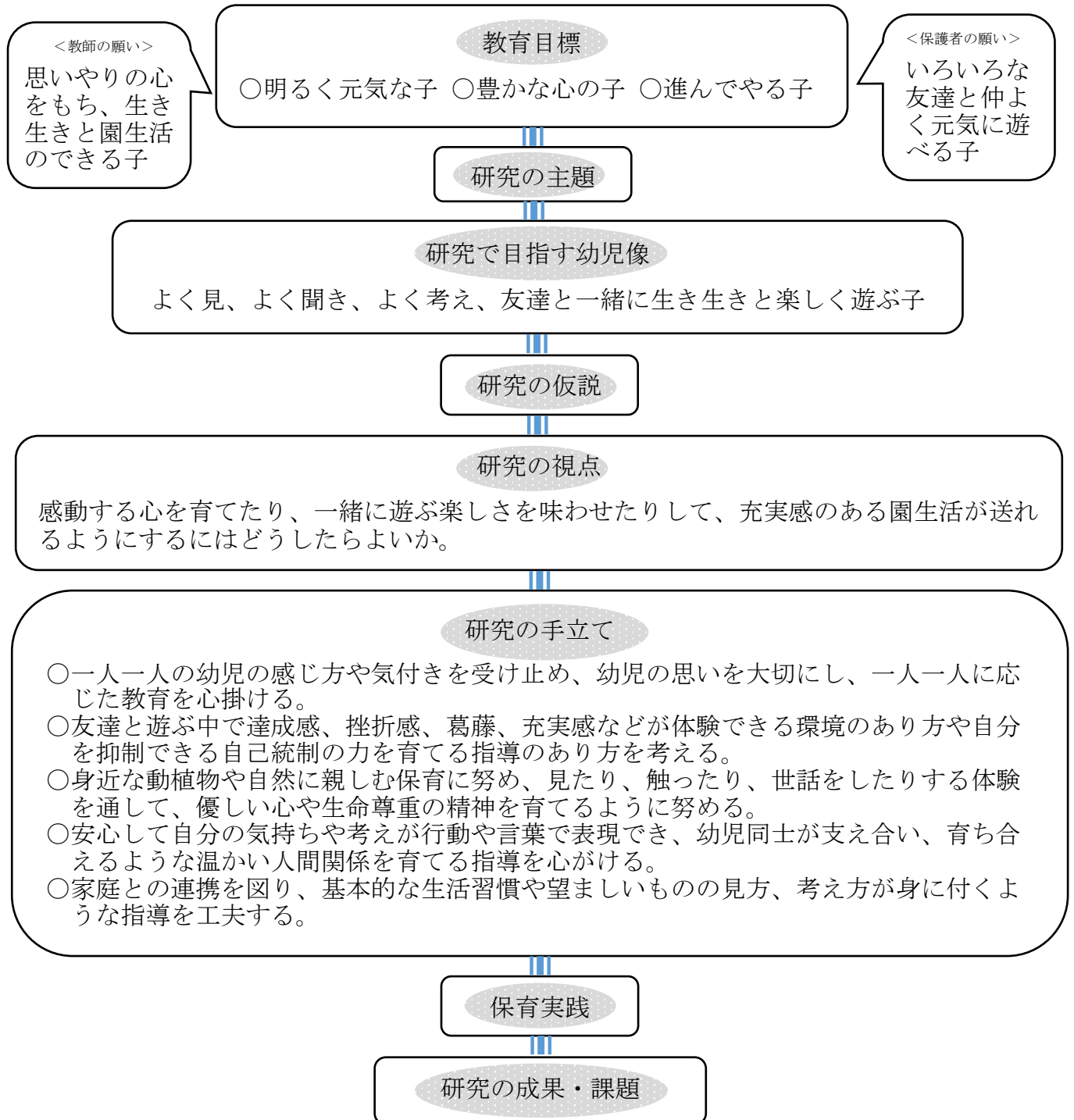
豊かな心を育む環境を考える ～幼児期の道德性の芽生えを踏まえて～

(イ) 研究の概要

a 研究の仮説

いろいろな遊びを通して、様々な体験ができる環境の構成や教師の援助により、幼児が十分に自己を発揮し、のびのびと生活したり、友達や自然と関わったりして遊ぶことができ、心身ともに健康で思いやりのある子を育てることができる。

b 研究の全体構想



c 具体的な取組

(a) 4歳児

- 事例1 4月～6月 「みんなでお片付け！」 資料8
事例2 5月中旬 「どうして仲間に入れてあげないの?『S子ちゃんはだめ!』」 資料9
事例3 6月中旬 「言葉で伝えて！」 資料10
事例4 10月中旬 「友達と一緒に楽しいな『忍者の修行ごっこ』」 資料11
事例5 11月頃 「ルールを守ろう」 資料12
事例6 2月頃～5歳児6月頃 「ルールを変えると楽しいね！」 資料13

(b) 5歳児

- 事例7 6月下旬 「友達と一緒に作ろう」 資料14
事例8 7月 「いっぱいとれたよ！」 資料15

(ウ) 成果と課題

a 成果

- 生活経験の異なる幼児が、一人一人の特性に応じた発達を成し遂げていくためには、教師の役割や環境の構成が大切である。発達に必要な体験を主体的に重ねていくことができる教師の援助や、幼児が自ら学ぶことができる環境構成に努める必要がある。
- 幼児は、集団の中で友達と関わることでトラブルも起こすが、トラブルを通して自分と違う考えのあることに気付いたり、自己主張したりしながら相手を意識した生活ができるようになる。こうした中で友達の真似をしたり、認め合ったりする心の成長が見られる。
- 教師は、幼児と共に生活する中で、幼児同士の遊びの様子を見守ったり、時には率先して遊びに加わったり、幼児が何を楽しんでいるのかをよく見たりして、遊びが発展するような環境の構成や援助をすることで、教育的に価値のある活動につながる。
- 幼児の遊びから、何が育っているか、何を育てたいのかを常に念頭において保育を心がけることにより、幼児にかける言葉や手助け、環境の構成などが的確にできることから、保育の評価反省と、一人一人の幼児の育ちを日々見つめることが大切である。
- 教師が、幼児の遊びを豊かにするようきめ細かな環境を整えることで、幼児の遊びは活発になり、そこで遊ぶ友達と関わる心も育つことから、幼児の発達にふさわしい経験ができるような環境の構成に努めることが大切である。
- 身近な自然や動植物との関わりは、継続して行うことで変化に気付いたり、扱いに慣れたり、感動の喜びを味わったりすることができる。このような経験を通して、幼児期に育てたい感性や様々な心の育ちが見られる。

b 課題

- 一人一人の育ちのみならず、集団の育ちも考え、幼児が満足できる関わりをもつとともに、きめ細やかな気配りのある指導に心がけ、充実した園生活が過ごせる環境の構成と援助の工夫を図る必要がある。
- 幼児期の教育は、家庭との連携が必要であることから、信頼関係を築き、安定した生活環境の中でよりよい成長ができるように努力する必要がある。
- 保育所や小学校との連携を一層密にし、中学生や地域の高齢者などとのふれあいの機会を積極的に設けていく。